
いいわけ

emanon

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いいわけ

【Nコード】
N8867F

【作者名】
emannon

【あらすじ】
刹那の快、悠久の苦。苦しむのが嫌ならさつさと死ねばいい、だから人はいきつづける。されど人はいきつづける。感想、評価、よろしくお願いします。

死のうと思っていた。

死のうとした。

死のうと思う。

『病室の壁ってどうして、しろいんだろう』

真っ白な壁。この閉鎖空間と、自由な外界をつなぐたった一つの窓からみえるのは、ぼやけた灰色の縞模様だけ。ザアザアと音がするから、雨が降っているのだろう。私は眼が悪いから、少し天気が崩れると、何も見えなくなる。

個人病室で過ごす一日は退屈だ。昨日も退屈だったし、今日も退屈だ。明日も退屈だろう。

ベッドの中から、手を伸ばす。真っ白で、貧弱な腕。自分の身体だけど、嫌い。

手だけではない。脚も顔も、髪の毛も、真紅の瞳以外、私の身体は真っ白だ。

ベッドサイドに手をやり、薬袋の山を掻き分け、一通の手紙を取った。

『愛しの志乃ちゃんへ』

星ちゃんの手紙はいつもその言葉で始まる。

彼女は、病院から出られない私の、たった一人の親友。

病弱な私なんかと違って、しなやかで、力強い、太陽みたいな女の子。

今、どうしているのかな。

会いたいな。

最近、あんまりお見舞いに来てくれない。

星ちゃんは、私と同じ歳で、中学校っていうところに通っている。「こーこーじゅけん」で、いろいろと忙しいって書いてあった。なんでも、勉強したり、将来を決めたりしなきゃいけないんだって。学校に行ったことなんて無いから、それがどういことなのか、私にはよくわからないけど、星ちゃんの文面から、大事なことだっていうのはわかる。

『将来』……ってなんだろう？

この身体は出来損ない。だから、私は世界を知らない。記憶に残っている一番初めから今日まで、ずっと、病院の中で過ごして来た。これからも、この陰気な白い空間から離れて生きることは出来ないだろう。そして、いつかはわからないけど、そう遠くない将来、私は死ぬ。そんな私が出来ることは、死ぬまでの暇つぶしくらいなものだ。他に何が出来るとか。

私には何も無い。

でも、星ちゃんは、違う。

進学し、就職し、結婚し、家庭を作り、子供を作ることが出来る。今、そのための準備をしている。だから、遊びに来れない。そういうこと。

なんだか、遠い。

これから、もつと遠くなるのかな。星ちゃんが入院していた時、あんなにも近くに感じられたのに、やっぱり、遠い存在なのだろうか？

私の知らない所で、私の知らない人と、私の知らないことをして私の知らないように生きていくのだろうか？

ふと、胸の奥が痛みに疼く。これは、肺だろうか、内臓だろうか。熱い。

手が震え、手紙がシートの上に落ちた。

苦しい。

絶え難い、痛み、苦しみ。このところ毎日だ。

萎えそうになる腕を伸ばし、今度は手紙ではなく、アルミにパツケージされたカプセルを掴む。この症状にあわせて、先生が処方してくれたものだ。

包装用紙がもどかしい。骨がグラつくような感覚を覚えながら、何個かとりだし、まとめて飲み込んだ。

力の入らない手をを無理やり握り締め、痛みを堪える。

はあ、はあ、……ふう

だんだんと震えがおさまり、代わりにまぶたが重くなってきた。薬の副作用だ。これもいつもの事。

ただ繰り返す、痛みと眠り。

いつもの事。

惚とする意識のなか、誰かの声が、聞こえる。

いつもの悪夢。

「アルビノだかなんだか知らないが、一族に遺伝子的欠陥があると
言いふらしているようなものだ。まったく……」

「このまま一生病院暮らしって養育費はどこから出すのよ？」

「人類のアルビノは世界的にも非常に珍しい事例です。不躰で申し
訳ありませんが、よろしければ、我が病院で、その、原因調査など
を……」

「要はただの、サンプルってことでしょうか？」

「養育費はこちらで負担いたしますので」

「渡りに船とはこのことだな、いいだろう。ちょうどいい、世間的
には死産だったことにして……」

私は、不必要な人間。

私は、無意味な人間。
それなら、私は、なんで生きているのだろうか。

気分は最悪。

多分、副作用で神経伝達物質だとか、ホルモンだとかがおかしくなっているのだろう。

薬で眠ったあとは、いつもこうだ。

堕ちる。

心がささくれ立ち、ぐらぐらと揺れる。まるで、風に煽られる枯葉にでもなったようだ。

ぼやけた視界。窓を見る、相変わらず、何も見えない。

今日も、星ちゃんは居ない。

ぽつんと、白い部屋に取り残されてしまった。

どうして、ここに生きているんだろう。

私にあるのは真っ白な部屋と、真っ白な生だけ、意味も、価値も無い。

図書室の本に書いてあった。生物は、自己を保存するために生きていけるのだそうだ。

別の本には、人は、何かを成す為に生きる、と書いてあった。

私は何をしたらいいんだろう。何がしたいのかわからない。ただ、なんとなく、惰性で、何かに流されるままに、ここにいる。

どうすれば、この陰鬱な世界から抜け出せるのだろうか？

「……死んじゃおうかな……」

ただ、痛みに耐え、眠るだけの毎日にどれだけの意味があるのだろうか。

だったら、死んでしまえば、全てはうまくいくのかもしれない。

死は、無だ。全てを平等に、理不尽に消し去ってくれる。

そこまで、考えた私は思わず笑ってしまった。

今まで、何度、同じ思考をたどり、その結論に行き着いたか。飛び下りるつもりで、何度も屋上に立った。そこまでは簡単。病院は庭みたいなもの、裏口は山ほどある。

手すりを乗り越え、下を見たとき、脚が竦んだ。

ここから、飛び下りて、地面に叩き付けられるのだと思うと、怖かった。

発作でもあれだけ苦しくて痛い、『死』というのはどれだけ痛くて苦しいのだろう。

痛いのも苦しいのも嫌だ。嫌だから、死ねない。でも、生きていても、やっぱり痛くて苦しい。

堂々巡り。

そうだ、いい事を考えた。死ねないなら、殺してもらえばいい。どうしてこんなことに気付かなかったんだろう。

それは、我ながら、名案に思えた。

今日もそれは唐突だった。

違和感は部分的にやってくる。その後、全身に転移する。疼きから痛みへ変わる。

四肢が震える。

悪寒、痛み、苦しみ。負の感覚が押し寄せてくる。

全身が総毛立つ感覚。

無意識に手を伸ばし、薬を探す。

しかし、いくらやっても、虚しく空を掻くのみ。

そうだ、昨日、全部捨ててやったのだ。

苦しむ私を、もう一人の私はあざ笑った。

死ねないのなら、殺してやろう。

私が、私を殺せないのなら、この身体に殺してもらおう。

こちらから近づけないなら、向こうから来てもらえばいい。

幸い、私の身体は死にかけている。なら、少し手を貸すだけでいい。

そのまま、死ね。

痛い

苦しい

痛い

苦しい

体中の骨と肉を引っこ抜かれるような激痛。

「ひうううう……っ！」

掠れた悲鳴が漏れる。

痛い、痛い、痛い、痛い痛い痛い痛い痛い

いたいいたいいたいいたい

イタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ……

まだ？ まだなの？

まだ死ねないの？

早く、早く、死んで。

歯を食いしばる。両腕で、自分を抱きしめ、その時を待つ。

唇のはしからこぼれるのは、唾液か、血か。

細腕に指を立てる、爪が食い込み、血が滲む。

それでもまだ、その時は来ない。

ナースコールのボタンが目に入った。

見るな。みちゃいけない。押してしまったら、死ねない。

でも、あのボタンを押せば、看護師がとんでくる、痛み止めでもなんでもうって、楽にしてくれる。

見てはいけない、触ってはいけない。

そう思いながらも、自分の意思とは別の力が腕を伸ばそうとする。少し動かただけで激痛が走る、しかし、私では無い何かが、勝手に腕をうごかし、強制的に呼び出しボタンを握らせる。

『そうだ。何も、このまま死ぬ必要は無い』

誰かの言葉、それは悪魔の誘惑。

『集中治療室に運ばれて、『手遅れ』であれば死ねるんだから、押しちゃいなよ。痛いでしょ？ ほら、もう、いいじゃん』

うるさい。黙ってよ。

腕が、スイッチに届いてしまった。コードにつながれている、握って押すタイプのスイッチだ。

「こ……の……っ」

私で無い私を抑え付け、指をスイッチから引き離す。

ぼとん

手からスイッチが零れ落ちた。

どう？ これなら死ねるはず。

視界がかすれ始めた、意識が、徐々に薄くなっていく。

私の勝ちだ。

私はこれから、死ぬんだ。

「でね、聞いてよ、しいちゃん……」

星ちゃんが、学校で起こったことを、面白おかしく話してくれる。大きな瞳をくりくり、ぱちぱちさせながら、しなやかな手足をばたばたさせながら話してくれる。

私は、こくこくと相槌を打ち、時折、身体が壊れんばかりに笑うのだ。

『しいちゃん』というのは私の事。今のところ、私をこう呼ぶのは星ちゃんだけだ。

いつもの真っ白い病室。でも、今日は隣に椅子に座った星ちゃんが居る。それだけで、何か、こう、違う。

結局、私は自分を殺せなかった。覚えていないが、私が自分でナースコールを押し、寸でのところで看護師が駆けつけたらしい。

余計なことをしたものだ。

でも、今は死ななくてよかった、と思える自分も居る。

私はとても、ゲンキな性格みたいだ。星ちゃんが遊びに来てくれたっただけで、心の中の黒いモヤが無くなってしまった。

「もう、最近、勉強ばかりで嫌になっちゃう」

星ちゃんは、そうつぶやくと、ばふう、と音をたて、私のベッドに突っ伏した。ベッドに腰掛けている私は、ふとん越しに膝枕している形になる。

「勉強なんて何の役に立つのかなあ」

私の膝にぐりぐりと頼ずりしながら言った。

「せいちゃん、くすぐりたいです」

「いいじゃない、久しぶりなんだから、ちょっとぐらい我慢してよ」。　　ってか、進路決めろ、とか言われても何していいかわかんないし、何すればいいかわかんないし。ただ、毎日、毎日、『嫌なこと』を消化して、時間だけが過ぎていく気がするの」

思わず、苦笑してしまった。

「ちよつと、なに笑ってんのよ、笑わないでよ」

「あう、ごめんなさい」

「まあ、いいけどね、しいちゃんの笑顔見てたら、なんとかやっていけそうな気がしてきた」

なあんだ。

やっぱり、私達は同じなんだ。

「それにしても……眠い……」

と言いながら、しばらくじやれていた星ちゃんが、そのうちに寝息をたて始める。しゃべり疲れたのか、日ごろの受験勉強の疲れか、多分、両方のせいかな。

私も、星ちゃんも、毎日続く『嫌なこと』を消化しながら、生かされるままに生きている。情性のように生きている。

二人だったら、あんなにづらいことも、笑い話に変わってしまう。もうちよつと、生きていてもいいかな、って気になる。

ころり、と星ちゃんが寝返りをうつた。椅子に座ったままベッドに突っ伏しているというのに、器用だな、と思う。

横向きの格好になったから、星ちゃんの寝顔がこつちを向いた。

可愛いなあ

ふと思いついた。今がチャンスだ。

柔らかく、星ちゃんの頭をキャッチ、髪の毛がふわふわして気持ちいい。

そして、自分自身、お尻を横滑りさせ、横向きに倒れこむ。顔を向かい合わせる。息がかかるほど、近い、あと少し。

「大好き」

んちゅ。

唇に唇を押し付けた。柔らかくて、りんごみたいな味がした。ぱちっ。

三センチ前の瞳がしばたいた。

「ふえ？」

ちよつと、硬直。そして、時は動き出す。

「ふええええええええええ！？」

星ちゃんの声が、病院中に響いた。

『死のうと思っていた』

『死のうとした』

『死のうと思う』

そう書いて、ノートを破った。

靴を脱いで、遺書の上に置いた。切れ端が風にとばされないための重し代わりだ。

手すりを乗り越える。

僕は独りだった。

それに、平凡で、くだらなくて、退屈で、忙しくて、面倒な毎日を過ごすのに疲れたのだ。

靴下からアスファルトの感触を感じる。冷たい。

眼下には、豆粒のような人や、マッチ箱見たいな自動車が見える。ふと、思った。

僕の死はどのように伝えられるのだろうか？

でも、そんなことはどうでもいいことだ。僕はこれから死ぬのだし、どう伝えられるにせよ、ただの自殺者として、すぐに人々から忘れられるだろう。

さて、逝くか。

僕は、空に向かって倒れこんだ。

風を切り、地面に向かって加速していく。

視界がアスファルトを埋め尽くした時、僕は、自身の頭蓋骨が碎ける音を聞いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8867f/>

いいわけ

2010年10月16日00時14分発行